

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

今日から7月、あっという間に1年のうち半分が終わった。「時はものをすり減らし、音を立てないヤスリだ」と、イタリア

のことわざがある。コロナ禍に振り回された日々は、人の命や心を、音をたてないヤスリのように、すり減らされているのかと思ってしまう。コロナ禍に振り回されながら過ぎた時間の流れは社会全体を大

気がつかない。そのため、例えば体内時計では半年たったと思っても、現実には既に1年が過ぎていく。実際の時間経過に、自分の生命の回転速度がついて行けないと記している。年をとるほど、ラ社のイーロン・マスク最高経営責任者は、日本の人口減少を巡り、「何かを変えない限り、日本は存在しなくなる。世界の大きな損失だ」とツイートし、話題になった。政府が公表した昨年

子どもを社会で育てる意識を持つべきだ

大きく変えた事実を忘れる事は無い。月日がたつのを早く感じるのは、生物学者の福岡伸一さんの著書によると「体内時計」が影響しているという。体内の新陳代謝の速度は加齢に伴い遅くなって行くが、自身は

1年間の出生数は、約81万人と過去最少を更新。初めて100万人を切った2016年からわずから5年で約2割の減少状況だ。今後出生率が持ち直しても、人口減少事態は避けられない。出生数で社会保障の姿は大きく変わってしまう。

「中学卒業後これまでデートした人数」を問うと、ゼロの回答は、20代の独身女性で約25%、男性は約40%。「配偶者・恋人はいない」との問いに、20代の女性には51%、男性は66%の回答が多かった。出会いを求めている人は多いと信じている。今からでも遅くはない、長期的視点から社会で「産み育てる」施策に期待したい。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上七)



松川河川敷の早朝の幻想的な風景。思わず「ぎり」「もや」の遣いを考えてしまう